
愛と欲望と純情と。

森永パピ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛と欲望と純情と。

【Nコード】

N0758Z

【作者名】

森永パピ子

【あらすじ】

幼馴染と遠い親戚の女子高生の微妙な関係にうっかり萌えてしま
う、残念なイケメンの話。

「あゝあ。もーただただめんどくせえなあ！」

幼稚園の時からという驚異的な腐れ縁の拓真の部屋のこたつでビールを飲みながら、昨夜会った女に対して悪態をついた。

二ヶ月前に合コンで意気投合してその日のうちにホテルに行って、何度か会ってヤッて帰ってを繰り返していたら「うちら付き合ってるんだよね？」と突拍子もないことを言い出したので、「は？なにそれウケる」と返したらぶん殴られた。

「あは。なんかやりたくなっちゃった」と尻軽なことを最初に言ったのはあの女だったのに。

キャラメルブラウンのお団子ヘアに、いつも困ったような薄いハの字眉毛のつけ睫ばっさばさメイクに古着の着こなしの上手い、美容専門学校に通っているといった女。

話し始めるときの主語が自分の名前という頭の緩い感じがイラツときたが、時々会う分には困らなかった。

「お前が軽すぎんだよ。言い寄られりやすぐ食っちゃってよ。リップサービスだかピロートークだか知らんが適当なこと抜かしてその気にさせて、メンドクサイからってポイ。お前の脳みそ液化してんじゃねえの」

拓真は俺の向いのくたびれた合皮ソファに深く背をもたれたまま紫煙を吐く。

顎鬚がよく似合うごつい風貌のワイルド系。それでも本の装丁や有名ブランドのイメージパネルを製作するようなデザイン事務所に勤めている。

今日は半ドンで明日が休みとかいう珍しい楽勝シフトだと聞いていたので、さっそく押しかけたわけだ。

俺は某アパレルメーカーで販売を担当している。今日は仮病を使

って仕事を休んだ。明日も休む気満々だ。

社会人になってからというもののなかなか長い時間をかけてダラダラ飲む機会も減り、久しぶりに髭の部屋を訪れたのだがいつ来てもこいつの部屋は小奇麗でインテリアもさりげなく凝っている。

同じ男としてむかつくこと山の如しだ。その上この髭ゴリラ、ぶっきらぼうだが相手のことを考えてあげられるような奴として女の子に認識されている。結構モテる。なのに特定の彼女はいない。興味ありませんみたいな余裕ぶっこいた態度がムカつく。それに俺に対する冷たすぎるこの態度はなんだ？

拓真を怨念を込めた目で睨むと「ウゼッ！ こっち見んな」と一蹴された。

「なんだよ。親友が振られてんのに慰めの言葉一つも忘れたか髭ゴリラ」

「うっせえ。殺すぞ。チンポ脳みそが。てめえの脳みそザーメンしか詰まってねえんじゃねえの」

あまりに口汚い罵りに言葉を失っていると、髭ゴリラの携帯が鳴った。ディスプレイを確認して、迷惑そうな目で俺をみやると、舌打ちをして機器を耳に当てた。は？ 俺が迷惑なの？ 電話の相手がタイミング悪いんじゃないの？

「……どうした？ ん？ 今？ ああ、ちょっと、うん。え？ マジかよ。いや。いいけど、今あらたな新がいるんだよ。うん。それでもいいなら、うん。俺はいいけど」

キモいくらいに優しい声で、俺のほうをチラチラ覗う。言葉にしないででも『ああウゼエ奴がいるな』と思われるのがひしひしと伝わってくる。時計を見るとまだ18時。帰るには時間を持て余してしまう。俺は帰らないからな、と意思を込めて髭ゴリラを睨み返すと、話し終わったのか携帯を尻ポケットにしまい、俺が散らかしたビール缶やちよつとアレな雑誌を大雑把に片付け、振り返る。

「依子来るけど、お前どうする？」

「は？」

頭の中でヨリコという名前を瞬時に検索したが、俺と髭に共通するヨリコ。該当するのはただ一人。俺と髭が中学校の時に近所に引っ越してきたという髭の遠い親戚の娘、持田依子。

八歳年下の彼女は髭にべったりでおにちゃんおにちゃんと仔鴨の如く髭の後を追っていた。思い出せる限り、依子はやせっぱちのチビで、夏はよく日に焼け、冬は鼻の上を真っ赤にしてその鼻の下は産毛とかぴかぴになった鼻水で白く乾燥させていた。

生きていたら今頃、十六歳。あのまま成長していたとしたら、他人事ながら悲劇だ。

一人っ子の俺と違い、髭は二歳年下の弟がいて長男という立場上小猿の扱いに慣れていた。無邪気に後をついてくる幼児を無下にすることもなく嫌な顔一つせず構っていたのを思い出す。

高校に入学して間もなく、せっかく女の子と四人で遊ぶという機会を作ったのに、髭がチビの世話に追われそうになっていた。ので依子に忠告をくれてやったことがある。

『拓真もお前の世話で青春潰すわけにはいかねえんだよ。優しいお兄ちゃんがいつまでもお前の我儘きいてくれると思うなよ。甘ったれんな』

当時小学校に上がったばかりの小猿に理解できたのか不明だったが俺のお灸は効果覲面で、それ以来小猿を見かけることはほとんどなくなった。

だというのに、これはどういうことだ。髭はあの小猿と未だに繋がっていた。それに今の話し振りからしてこの部屋に来るのは今回が初めてではないらしい。実家から十個以上離れた駅のこの土地にわざわざやってくるなんて相当だろ。

「もしかして拓真。俺に帰れとか言いたいわけ？」

俺は居座る気満々で新しいビールを開けた。

「お前依子のこと嫌ってただろ。だからきいてやってんだけど？」

「はあ？ 先約俺だろ。土壇場で来てんのあっちじゃねえか。なんで俺が帰らなきゃなんねんだよ。なに？ お前まさかあの小猿と付

き合つてるとかいわねえよな？」

わざと髭が怒る^{いか}ように笑いながら言うと、案の定、眉間に皺を寄せて唇を嚙んだ。

「下衆の勘繰りも大概にしろよ。今度猿とか言ったらマジぶっ殺すからな」

ドスの聞いた声で言われ、さすがの俺もビビった。髭は見た目も声もいかついたので、切れると生命の危機すら感じる。けれど、ここで怯むわけも行かず、俺は再び口元で笑った。

「なに？ お前、惚れてんの？」

「クソが。そんなんじゃない」

拓真が吐き捨てると丁度、玄関のチャイムが鳴った。

緊迫状態が解け、髭が居間からいなくなるとやっぱりホッとした。玄関のほうからドアを開ける音がして女の声が出た。

「突然ごめんねお兄ちゃん。今日依子バイト代貰ってね、お兄ちゃんも今日仕事早く終わるってメールで教えてくれたじゃない？ だから一緒にご飯食べようと思って色々買ってきちゃったの。でも、いきなり邪魔してごめんね」

超けなげな台詞と、ごそごそとビニル袋のする音がきこえて、髭のうーとかあーとか煮え切らない声が出たので俺は重い腰をあげた。

「別に俺はいいけど。帰っちゃうの？」

短い廊下から顔を出した俺を髭は鬼の形相で振り返る。そのすこし向こうで、記憶の小猿とは全く程遠い制服姿の女子高生が素顔っぽいけど大きな目を見開いていた。左の耳の下で黒髪を一つに結わえているのは減点だ。まあまあ可愛らしい顔をしているのに化粧っけも素っ気もない。

「……誰？」

思わず指差すと、小猿ではない女子高生がむっと唇を引き締めた。

「ご無沙汰してます。持田依子です」

「嘘！ マジで?!」

俺がかけよると、髭の太い腕に前を塞がれた。

「近寄るな。お前みたいな奴と関わらせたらろくなことになるん」

「はあ？ なにそれ。まるで俺が病原菌みたいじゃん。ひっど！」

「お兄ちゃん、私帰るね」

依子はさつと顔を下げて、満タンの大きなビニル袋を二つたたきに置くと身を翻した。

「待てよ」

彼女を止めたのは髭。ブレザー越しでもその肩が華奢だということとがわかる。

奴の手がでかすぎるのか、はたまた彼女が華奢なのか。肩と手。その対比がやけにエロい。

ドラマを見ているような気分で、何故か俺はドキドキした。

「ったく。手え超冷てえじゃねえか。せつかく来たんだから上がっていけ。だいたいな、うちに来る時は駅で電話しろっていつも言ってるだろ。迎えくらい行つてやるからこんな夜道を一人で歩くな」

過保護な親父みたいにぶつくさ言いながら彼女の手を引き寄せる。

「で、でも」

「あ？ こんなヤツのことは気にするな。なんか言ったら俺がしめてやるから」

「……わかった」

素直に頷くその顔は、控えめだが嬉しそうに綻びかけている。髭が下心なしで彼女に接しているのが不思議でしようがない。いや、まさかもう喰ってんじゃね？ 俺は無言のまま髭の嫌いな下衆の勘繰りを続けた。

「お酒飲んだの？」

まるで自分の部屋のようにブレザー姿の少女は狭い台所に立ってお茶を淹れている。俺と髭は妙な空気を漂わせたまま向かい合ってたつに入って、髭はテレビを、俺は彼女の後姿を眺めていた。

制服で台所なんかいがわしいにも程がある。この髭いつもこん

なことさせてんのかと腹立たしい気持ちになった。

「ああ。こいつがどうしてもって言うからな」

髭は流れているバラエティ番組を眺めながら煙草を吹かしている。
なんだこの余裕。

「そっか。じゃあ、二人ともお茶はいらないよね？」

「ちょうど欲しかったところ」

二人のこなれた雰囲気がかついで割り込むように言うと、髭が
黒目だけで俺を睨んだ。

「お兄ちゃんは？」

「俺、ビール飲んでるからいらね。それよりなんか作ってくれんのか？」

「うん。お鍋しようと思ったの。鳥の水炊き」

「おー、いいな。なんか手伝うか？」

「いいの。お兄ちゃんは座ってて。簡単だし」

「んじゃ、土鍋と卓上コンロ出しとくわ」

髭はのそりと立ち上がり、女子高生の隣に立つと台所の天井に近い棚から土鍋セットを取り出す。

っていうか。身長差とか体格差とかありすぎじゃね？ 髭が百八十越えで、隣の女子高生は百六十あるかないか。足の細さとか背中の薄さとか肩の小ささとか髭のせいで際立つことこの上ない。

だいたい今の会話の流れとかほぼ同棲カップルじゃん。急に肩身の狭い気になってきた。材料とか二人分のつもりで買ってきてあるわけだし。なに？ 俺これじゃマジ邪魔者じゃん。うわ。なにこの居辛さ。うぜエ！

「ヨリおまえ。こんなに買って大丈夫なのか？ 給料ちゃんと余ってんのか？」

「大丈夫だよ。ちゃんと稼いでるし、そんなに自分で買うものとかないし」

「ふうん。半分出してやるからいくらだったか言え」

「やだ。私出す。出せるもん」

「生意気なこと言いやがって」

「生意気じゃないよー」

苦笑する髭の口調は優しい。相変わらずガキの我俣に付き合っ
てやっているのか。

しかし髭の横でぷうぷう頬を膨らませて文句をたれている依子は、
もう俺が知っていた小猿と違う。相変わらず甘ったれているようだ
が、あれはただのガキの甘え方じゃない。ガキと女が微妙に入り混
じった甘ったるい声。拓真は兄貴面しているが気づいているのだろ
うか。

「なあんか、俺。邪魔っばいから帰るわ」

すぐに重くなる怠惰な身体を引きずるように持ち上げ、のそのそ
とこたつから出る。

「あ？」

今更かよと顔に書いた髭が卓上コンロを持ってこっちを見た。

「邪魔とか、思っていないですけど」

ちよつと強張った声で依子が言った。二人だけのオーラバンバン
出して、髭しか見てないのだから俺を邪魔だと思う隙もなかっただ
けだろう。のほほんとした二人のやり取りに自分でも驚くことに嫉
妬している。こんなエロ可愛く育つならもう少し我慢していればよ
かったかな、と考えが過ったが、彼女をそうさせたのはこの髭ゴリ
うなのだからと思い直して何故か虚しくなった。

「いやあ、オアツイ二人の邪魔しちゃ悪いじゃん」

皮肉っぽさ丸出しの口調に我ながら呆れた。

「なに勘違いしてんだよ、バーカ」

髭はこともなげに言うコンロを卓上に置いて、吸いかけの煙草
を口に運びこたつに入った。

いつの間にか歌番組が始まっていて、ありきたりなセツナイ歌詞
の流行歌が流れている。髭は興味なくせにその番組に見入ってい
るような振りをしている。

ぐつぐつと煮立つ土鍋の中には、煮えただし昆布がのんびんだら

りと広がっている。ガス台から依子に視線を移すと、傷ついたような顔で呆然と立ち尽くしていた。

「なんでお前ら黙ってんの？」

きっかけは俺かもしれないが、この空気を作った張本人は訝しげに俺たちを見回した。

「勘違いって、なに？」

自分の口から零れ落ちた言葉に、ハッとして手を当てた。

「あ？」

拓真は煙草をくわえたまま眉をひそめる。そのすつとぼけた態度がムカついて、依子ためにも誤魔化しといてやろうかと思ったが、やめよう。

「普通、自分の部屋に女連れ込んで飯作らせて、なにもありませんとか、なくねえ？」

「てめえと同じ頭で考えてんじゃねえ」

拓真は立ち上がって俺に詰め寄る。十センチほどの差がやけに大きく感じる。威圧感の塊に怯みそうになるが、そこは幼馴染のよしみか引き下がる気にはならない。

「じゃあなに？ お前はなんにも感じてねえの？ けっ。ただのインポ野郎じゃねえか」

「てめえくだらねえこといってるとぶっ殺すぞ！」

「やってみろ！ クソ髭ゴリラ！」

ほぼ同時に互いに掴みかかると、俺たちの間に小さな手が伸びた。「やめてよ。どうして喧嘩してるの？」

落ち着いているのではなく、恐怖に震えるか細い声が、俺たちの血が上った頭を冷やした。

「やっぱり、私、きちやダメだったね。ごめんなさい」

初めて目に涙を溜めた女を可愛いと思った。涙は武器だと思い込んでいたような女にはいつも萎えさせられたが、こうも素でやられると参る。

髭は気が削がれたといわんばかりに俺を振り払い、ふんと鼻を鳴

らした。

「ヨリが謝ることじゃねえ」

ちゃっかり彼女の頭をぼんぼんと軽く叩いて慰める髭の手際のよさに驚いた。

「俺らが勝手にやったことだから」

俺も便乗して彼女の髪を一束すくって指を滑らすと、髭が睨んできた。

「こうしてると昔みたいだね」

屈託なく涙目のまま俺たちを見上げてへにやつと笑った。

「私が転んだらお兄ちゃんが急いで戻ってきてくれて、新くんが仕方なさそうに一緒になって慰めてくれたよね」

仕方なさそうに、は余計だが事実なので反論はしない。だが、依子に言われるまでそんなことすっかり忘れていた。

「こいつがヨリに余計なこと言わなきゃそのまま三人だったかもしれないなかったのにな。今頃、俺とヨリに妬いてんだぜ。バカじゃねえか。な？ ヨリ」

「は？ 余計なこと？」

「ヨリに甘ったれんなって言ったのお前だろーが」

髭が目を細くして俺を睨む。

「あの時すごくショックだった。私邪魔者扱いされたんだって夜一人で泣いたんだよ」

「んなこと言われたって俺だって拓真のことと思って言ったんだよ。いっつもまとわりついてきて、髭の思春期が子守で終わっちゃ可哀想だろ」

「ふざけんな。俺の思春期勝手に心配してんじゃねえよ。余計なお世話だ馬鹿」

「私、新くんのこと嫌いだった。私のお兄ちゃん取ったんだもん」

「私のって、また従兄弟より遠いじゃん。おまえたち」

「そんなの新くんに関係ないじゃん。ねえお兄ちゃん」

「こいつはお前に俺を独占されるのが嫌だったんだろ」

「はあ？ なにいつてんの自意識過剰なんじゃない？」

三人で輪になってお互い言いたい放題言い合っていたら、十年そこの空白が嘘みたいに打ち解けた。

認めたくはないが、どうやら俺は拓真の言うとおり依子に嫉妬していた。ような気もしなくもない。

急成長した小猿は可憐な少女へと変貌している。拓真の理性が金剛石級なのか、ただの鈍感かばちゃ頭なのかわからないが、依子はサブバッグにお泊りセットを準備していた。安心しているのか、覚悟を決めてのことなのかこちらもわからない。いよいよ邪魔かもしれないと思ったが、拓真があっけらかんと「おまえも泊まればいいじゃないか」と提案したのでそのまま居座った。

そして、いよいよ就寝の時がやってきた。これで安らかに眠れるほど俺は間抜けじゃない。

湯上りの女子高生なんかできたての白米より芳しいはずなのに、拓真のスルースキルが信じられなかった。風呂から上がって煙草買ってくるのとふらりと出て行かれて俺が焦った。

湯上り卵肌と二人つきりなんておいしすぎる展開なのに、手を出そうという気はまったく起きない。拓真のベッドの上でうつぶせに寝転がり、文庫本なんか読んでいる眼鏡っ子には萌えたが、何故か自分がどうしようという気が起きないのだ。

「依子と拓真って、マジなんもねえの？」

気になって仕方ないので率直に聞くと依子は顔を赤らめて黙り込んだ。

「……全然」

それだけ言うのと文庫本を口元に当てて、悩ましげな溜息をついた。おいおいおい！！ 据え膳喰わぬ気か！！ いまだ帰ってこない拓真に脳内でつつこんだが、盛り上がったのは俺の野次馬根性だけだった。

「じゃあさ、俺今のうちに帰ろうか？ したら、なんか起きるかも

よ?」

「……うん。そういうの嫌。それに今日だって新しくいなかったら、普通にご飯食べたならそのままお兄ちゃんの手で家に帰されてたよ」

「もしかしてここ来るとき毎回お泊りセット持ってきてんの?」

依子は黙り込んで、とうとう顔を重ねた腕に突っ伏した。

「……だって、ずっとお兄ちゃんと一緒にいたいんだもん……。昔みたいに一緒に寝たい……」

「ふうん」

一緒に寝とったんかい! というツツコミは伏せて平静な声で応える。俺だって自重くらい知ってるよ。ってか、今の年齢で一緒に寝て欲しいとかただの嫌がらせじゃねえか。

あのごつい手が、制服に包まれたまだ発展途上の身体をまさぐる想像をした瞬間、こたつの中で半勃起した。

おおい! それなんてイメージDVD!?

妄想を払いのける為に首を振ったが、効果はない。

さっきの涙目が、いかつい身体に押し潰されながら、さ迷う。中途半端にボタンが外されたカッターシャツの隙間からサックスのブラと頼りない谷間が覗いている。それを乱暴にわしづかむ拓真の手。制服のプリーツスカートはたくし上げられ白い内股にも、手。それが奥へと侵入し、依子は軽く跳ねる。食らいつくようなキスと乱暴な手つき。

さすがにフル状態は見たことないが、拓真のあれは絶対ヤバイ。

あれに馴染ませられたら、もう――

俺の妄想は、雑な玄関の開閉音で強制終了させられた。

「うおお寒い!」

自分の身体を抱くようにさすりながら居間に登場した拓真が俺たちを見た。

「なんだあ? おめえらまだ打ち解けてなかったんか?」

「はあ！？ バッカ！ 超打ち解けてるつつうの！ なあ？ 依子？」

「……うん」

依子は文庫本で半分顔を隠しながら頷いた。どうもノリの悪い女子高生だなオイ。歳相応にはしゃげつつうの。

「まさか新、依子のこと虐めてたんじゃねえだろうな？」

ほら。髭が勘違いしたじゃねえか。俺の頭ん中じゃ依子を虐めてんのはお前だつ。

拓真の顔を見たらさっきの妄想がよけいリアルになって、こたつの中の不快度指数は上昇しているに違いない。

「なんもしてねえつつうの。あーマジ寒い」

俺は肩をすばませ、そう寒くもないのに震える振りをして膝を折り肩までこたつに潜りこんだ。やべえ。人んちのこたつなのに、楽になりてえ。つか変態じゃねえか。

「布団敷くからこたつで寝んなよ。風邪引くぞ」

「いーよ。イラネ。めんどくせえ。てかお前ら一緒に寝んの？」

「馬鹿」

拓真は当然の如くあつさりと俺を罵るとクロゼットから客人用の布団を引っ張り出した。

「久しぶりなんだから一緒に寝てやりゃいいじゃん」

「こんな狭いベッドで俺みたいなのが隣にいちや夢見が悪いだろ」

「そんなことないよ。寒いし、くつついて寝たほうが温かいよ」

ほらキタ！ 無垢なお誘い！ 断るのか？ まあ、拓真のことだからな。

むしろ逆の立場だったら俺も……、いや、ノリで寝るわ。

んでこっそり抱くわ。うわ。いいじゃん。キタコレ。

「ヨリ、あの馬鹿が伝染ったのか？」

「違うよー。別に私狭くても気にしないもん」

十六歳にしては知能指数の低い気もしなくはないが、依子は純粹に拓真と一緒に寝たいのだ。俺と拓真がうっかり想像しちゃうような内容とはかけ離れたありのままの意味で。この際抱けとか贅沢言

わないから、シチュエーションだけでも与えてくれ。

「っていうか、布団一個しかないじゃん。俺が依子と寝てもいいの？　なら喜んで布団いくよ？」

「お前こたつで寝るんじゃないの？」

「おいおい、風邪引くから布団敷いてやるって言った親切さんはお前だろーがよ！」

「その親切さんをめんどくせえつつったのお前だろ」

「んじゃいーよ。依子。俺とこっちの布団で親睦深めよーぜ」

「やだ。お兄ちゃんと一緒にいい」

空気読めや！！　せっかく俺がカマかけてんのに台無しじゃねえか！　怒鳴りつけてやりたいのを堪えて笑顔を作る。

「だってよ、お兄ちゃん」

そういつて含み笑いに切り替えてやると、拓真はグツと唇に力を込めた。

「ああもうわかったよ。一服したら寝るから先寝てろ。電気消すぞ」

「いい。煙草吸い終わるの待ってる」

「待ってなくていいから寝てろ」

おい、俺マジ帰ったがよくねえか。こそばいんだけどこいつら。

「あーはいはいおやすみちゃん！」

俺は半ばやけくそに言いながら拓真が敷いてくれた布団に滑りこむ。俺んちの八畳ワンルームより広いオサレ部屋が無性に腹立たしい。こたつとソファがあって布団まで敷けるってなにそれ。しかもベッドに女子高生付き。マジ死ねばいいのに。

しばらくして電気が消えて、「しょうがねえな、ヨリは」とか何とか言いながら髭がベッドの中にもぐりこむ気配がした。

俺の心臓はこれ以上ないくらいにバクバク暴れていて、とてもじゃないが安眠なんかできそうもない。

「えへへ。ねえ、ぎゅってしてもいい？」

こそそと声を潜めているつもりだろうが丸聞こえだ。うわ。なにこれにやける。髭どーゆー面してんだオイ。布がすれる音がして、

依子のひそめた笑い声がする。

「……あったかい……」

マドンナBかよ。髭、なんか言え。奴は依子と違い、俺が起きているのをものっそ気にしているに違いない。

「ねえ、お兄ちゃんもして？」

甘ったれてんなー。拷問だぞソレ。布団をかぶってニヤニヤしながら、髭の反応を想像したら笑いが止まらない。

「ねえ、お兄ちゃん」

「早く寝ろ」

もともと低い声が冷たく言い放つ。ひでえ！

それから夜の静けさが深くなった。依子の鼻を吸るのが聞え、何故か俺がやるせない気持ちになった。

ちよつとくらい応えてやれよ！ それともなにか？ マジでその気なし？ なのに依子に気を持たせるようなことしてんのか？ おい髭、俺にとやかく言えんのかよ！ これをこのまま言ってやろうかと決心をした同時に「んっ」と息を詰まらせたような依子のか細い声が上がった。

「新が起きたら冷やかされるぞ。いいのか？」

うおおおお、低い声で囁きやがった、うぜえ！ しかも起きてることは承知のクセに。これは俺を牽制したってとるぜ。気が利く俺としては！

「……よく、ない……」

女子高生エロいなオイ！！ 晩のオカズ、ゲットだぜ！ むしろモーニングショットか？ なんだよ暗闇でなにやってんだよ、集団家呑み合コンの裏二次会かつつうんだ馬鹿野郎。いいぞ。もっとやれ！

俺の願いが天に通じたのか、『ちゅ』と水っぽい音がした。うそ、うそ、だろ？ まさか、拓真、おっ始めちゃうのか？！ 期待を裏切らない漢だよお前！ ガッツポーズを密かに決め、さらに聞き耳を立てる。

「ヨリ、お前な……」

呆れたかすれ声が聞えた。うそ！ 女子高生積極的！！ 俺は布団の中で極力音を立てないように両手で顔を覆う。

「お兄ちゃん大好き」

をををををい！！ ここまできて理性崩壊しねえのかよ！ ベルリンの壁だってとうの昔に崩壊してんだぜ！！ もうマジやっちゃえよ！！ 俺寝た振り続行するからさ！！

「はいはい。おやすみ」

受け流すなあああ！！ 俺の心の叫びも虚しく。

「うん。おやすみなさあい」

無邪気な笑い声を最後に夜は本来の静けさを取り戻した。

気がつくと、鼾をかいて大の字になっているのは俺だけで、辺りは眩しい朝日に包まれていた。

「おはよお」

甘ったるい声がして、依子が朝日バリにまぶしい笑顔で俺を覗きこんでいた。

「んあ？」

俺はいつの間に眠っていたのだろうか、辺りを見回すと髭はすでに身支度を整えて、ベッドに腰かけ、コーヒ一片手に新聞を読んでいた。

「おっせーよ、バーカ。会社に連絡しなくていいのか？」

「今、何時？」

「六時半。俺、これから車で依子学校に連れて行くけど、お前も乗せて行ってやろうか？」

「んー、俺、もうちょつとここいるわ」

「あっそう。んじゃ、行くか」

髭は立ち上がり、さっさと玄関に向かう。

「私、トイレ行くから先に行ってて」

「おー」

髭は応えて、玄関の閉まる音と足音を残して行ってしまった。

「新くん、ありがとう。初めてお泊りできたの新くんのおかげ」

「んーにゃ、いいよ。別に礼を言われるほどの事してねえし」

「またみんなでご飯食べようね」

「したら拓真とエロいことできねえよ？」

「サイテー！」

依子は顔をしかめ、身を翻す。短めのスカートから見えたのは、柔らかいパステルピンク。妄想とは違ったが、悪くない。

「じゃあ、またね！ エロエロ大魔神さん、いつてきます」

そのネーミングどーよ？　　と思いつながら、彼女の横顔に手を振る。パタパタと軽快な足音を立てて、依子は玄関を飛び出していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0758z/>

愛と欲望と純情と。

2011年12月2日22時53分発行